

領域と領域経済

― 富山売薬行商の地理的研究によせて ―

植 村 元 寛

第一節 は し が き

「生きてゐる歴史」として二五〇年間あるいはそれ以上の長い間、全国の諸地方に売薬行商を続けてきた富山の売薬業が、ほとんど何らの手も加えられずに業者或いは団体の旧慣に従つて今日まで、行商の経営——勿論そのあいだに時代により経営に相当の変貌は示したのであるが——を継続してきてゐることは興味ある、そしてむしろ奇蹟的な一つの現象であると云えよう。そのよつてくる原因については種々の見解がおこなわれるであらうが、それは我が国の伝統産業として日本経済構造の個性的ありかたと深いつながりを有していることだけは、人々の等しく認めるところである。

たゞこれに関連した我が国の中小企業経営の特異性なり、その解明方法なりについては研究者の立場によつて、また問題意識のとりあげ方によつて、未だ必ずしも十分な研究がなされているとはいえないようであり、ことに地方的伝統産業については最近漸く研究が進められる気運になつてきたとは云つてもなお未開拓なまゝに残されている点が決して少くない。一定地域にとつて重要な意味をもつものであつても、興味本位に或いは外面的な一面を明らかにするにとどまつて、その地域において立地する産業の本格的な調査や研究は必ずしも進歩しているとはいえないように思われる。地方的研究がおし進められモノグラフィがいくつも積み重ねられていくことが期待される。この点でフランスにおける

石炭について統計的、数量的に深く掘り下げたフランソア・シミアン Fr. Simiand の研究、またイギリスの穀物についてその市場の研究をなした格拉斯 N.S.B. Gras のような特定の現象そのものにおいて時代的、地域的性格を明らかにした優れた地に足のついた研究態度には学ばなければならない点が少ない。これらは既に古典的な存在ではあるが、そのオリヂナルな巧緻きわまる研究は、とくにシミアンにおいてはどちらかといえば経済社会学的研究であるが、その後の学界で華やかな論争が展開された時の論議の出発点には、彼らの研究がいつも問題とされたような示唆にとんだ地方的調査の総合された労作とされるのであつて、この故にこそその価値が高く認められていることは衆知のとおりである。これらは歴史学において著名な業跡を残していることは定評のあるところであるが、単に流通機構とその変遷を探究するのにとどまるものではなく時代性と共にその発展の空間性についての鋭い分析が推し進められていて、歴史と地理の深い知識から美事にその具体的究明がなされていることに注意せねばならない。

戦後においても、ことにフランスにおいては、最近留学から帰朝された宮本又次博士の語られるところによれば、両者の接近した研究方法による一定時代の産業の歴史的地理的分析が一つの特色ある傾向として成立しており、たとえばソルボンヌのオート・エチユードの第六分科である経済学と社会科学の専門課程におけるロンバール M. Lombard 教授の注目すべき研究がなされ、彼の中世社会経済史の講義は中世の商業路と文明の通路について説明をなすとともに中世経済の歴史地図作成についての資料の取扱ひ方法、探究、蒐集の仕方をも、これを基にして「経済地図学」[Cartographie économique] が講ぜられていること、またコレージュ・ド・フランスで歴史地理学を担任するデオシオン Dion の研究はフランスにおける「どう」の詳細な研究であるが、その栽培の歴史地理、葡萄酒の商取引をとりあげていて、すぐれて経済史的であるが歴史地理の分野に深く沈潜していることが特色づけられる。人文地理学と社会経済史学の深い関係はフランスにおいてルシアン・フェーブル以来、とりわけ大であることを思うものである。われわれはこの

富大経済論集

ような研究態度の理解については既にイースト・Eastやハシingerなどの地理学からも学んだのであつた。

研究対象としての地方産業、或いは地方の経済が表面に押し込まれるようになったのは必ずしも特筆すべき顕著な現象であるとはいえない。すでに地方産業の問題は、その問題意識のとり上げ方は異なるけれども、マニユ問題として登場したことは衆知のとおりである。また領主的貨幣経済と農民的貨幣経済との展開と対立、および領主的統制とそれに対抗する農民的貨幣経済の克服、或いはこれに絡みつく農業経営の地域的分化は商品生産の進展した江戸時代後半期における基本的問題であつた。これは封建社会の基本である農業生産とそのよつてたつ農村構造の変質のなかに新しい制度の展開への道を探さんとする重要な分析視角であつた。これらの研究のなかに経営規模、経営管理、労務管理などについての経営史的方面において、また原料や労力の市場関係、製品の販売市場や立地条件など経済地理的分野にわたつて分析が試みられたものが少くない。本書において以下とり扱おうとするような経営史的な理論に依拠しつつ地域の編成の合理化をめざした地方産業の把握の仕方は徐々に進展しつつあつた。ところでこれらの問題に関連して明らかにされねばならないのは商品生産に伴う流通面の究明である。流通なしに商品経済は考えられず、交換現象こそすぐれて経済に固有のものであることを思えば、流通過程を軽視してきた我が国の最近の傾向に対しては流通面に伴つて生ずる諸関係の問題があいともにとりあげられねばならない。商品流通は農民的貨幣経済の側からであろうと領主的貨幣経済の側からであろうと推進され活潑化してきたならば、藩の領域内部で終結する場合のほかには藩の領域をこえる商品移動が行われることになり、商品流通に伴つて作用しあう生産者、商人、消費者の間の諸関係や産地間の競争、地域的分化およびそれに絡みあう領域経済と他のそれとの関係の問題が提起される。ことに後者においては領域経済の商品経済化に伴い、その経済政策の展開はこれを強力に把握しようと努力を重ねてきながらその自立化をはかつた。

領域経済は江戸時代後半期の経済発展によつて、全国経済とよばれる商品流通の地域的並びに組織的構成の全国

的範圍への拡大のなかにあつて、各領域經濟の相互交渉、とくにその交易關係においては、領域意識が促進され、領域經濟のありかたは、全国的商品移動の中に却つて自らの主体の存在が認識されてその諸政策がおし進められた。^④各藩は概ねその領域を単位とする一個の領域經濟を形成していたが、これは内部に封建的關係によつて規制される構成単位として多数の個別經濟からなる社會經濟を含む或る程度の自律的な動きをなす經濟統制体であつた。そして藩の國產奨励や専売仕法による中央市場への進出がはかられ、藏物として領主經濟における領外輸出が行われるとともに、また問屋仲買物、自由取引物として領域内の個別經濟はその輸出入業務、或いはその一端としての他領内での經營を行うことによつて他領との交易關係に織りこまれるものが少くなかつた。^⑤ことに最後の場合のように他藩の領域經濟内に入り、従つてその統制をうけながらも、商人の經營が恒常的、規則的になされようとするならば、相手方の領域經濟において領内産業の保護、その領域經濟への影響、ことにその結果である正貨の流出などが考慮され、領域經濟における藩富の如何が意識されて、持続的対応策としての独自の方法と政策が地域と時代に応じて樹立されなければならなかつた。商人の機能乃至商人資本の側においても他領域内の經營には、これに対して或いは相互利益的に協調せんとし、或いは対立關係を克服せんとして適宜の經營政策を樹立遂行したのであつた。

本書はこの具体的な事例を、富山売薬商人の他領域入付による領域經濟との關係について、そこに展開された商人とそれをもたらす商品の移動と領域の作用を明らかにするものである。富山売薬商人は江戸時代の後半期に全国的に行商を形成し、陸上および海上の交通路を利用して諸藩の領域に入つて売薬を得意先に配置行商し、次の行商の折に集金をなし、売上高を正貨にしてその領域から引きだして帰国した。正貨の不足に悩む諸藩ではそれはたとえ金額は少量であっても由々しい問題であり、放任すべきことではなかつた。領域經濟は他からの何らかの刺激が加えられた場合、それに対する作用として領域經濟においてはさまざまな反応或いは抵抗を示すが、その反応と抵抗の種々の仕方を通じてわれ

富大経済論集

われは領域経済の実態あるいはその動態的本質の一端乃至、その地域差を認識することが可能である。もちろん一定地域の産業は常に諸国のそれと関係があるから、商品生産と商品流通とを密接に関係づけることなくしては成立しないものであるから、封建社会の基本的関係の問題をたんに商品流通の問題から解釈するものではないが、右のようにして行商人とこれに対する領域経済の種々の立場、即ち領主統制の差の地域的把握が可能であるならば、換言すれば西南雄藩東北諸藩やその他の藩で示される統制を説明することによつて、それから領域経済のありかたを知る一つの直截な手段があると考えられると共に、領域経済をば「場の構造」において問題とすることによつて、歴史と地理の相互理解を媒介として幕末の経済構造に対する把握、更には明治維新における地域の近代の構成のありかたへの理解を深めることが可能になると考えられる。

1、例えばFr. Simiand : *La formation et les fluctuations des prix du charbon en France pendant vingt-cinq ans* 1887—1912.

2、N. S. B. Gras : *The evolution of English corn market*

3、宮本又次 西欧の史的回想 二二三頁

4、堀江保蔵、近世日本の経済政策 六一頁

5、江頭恒治、徳川時代の経済構造（彦根論叢、昭和二十九年九月号）

第二節 領域の概念

領域は一つの統一経済地域であるとされることは通説になつてゐる^①。封建社会の基本的社会関係、とくにその地域の商品の生産、流通に対して必ず領主の統制が及んでいるのであり、これらの諸現象を経済組織、通貨の流通などを指

標として地域を区分するならば、その等質性に基ずいて——従つて地域全体が均一的であるという意味ではなしに地域を設定するための指標に関する限りにおいて均等性をもつものであり換言すれば均等指標によつて——得られる地域が等質地域 uniform region^②であるが、それが封建権力によつてその支配地について、中心とその周辺におよぶ政治的境界内部が機能的な同質性を標準として統合せられ、単位としての完結体を形成している場合にはこれは統一地域 nodal region^③として成立することになる。藩を地域的に構成する要素としての領域は農村・都市等とは別個の類型に属する地域概念であつて、このようにこれら地域社会の機能を統一するものとして考えられるものであり、領域は封建領主の統治する藩が一定の位置と広がり、土地、即ち領地とを占有して存在している状態である。位置とは四隣^④に対する関係をとくにその交通を運動との可能性からみたものであり、従つて地域構造の全体のうちの特定部分について考えられ、諸領域の配列の状態において他の部分に対する関係をさすもの、広がりは大きさと形態及び構造を自らのうちに含んでいるもの^⑤と解せられる。これらの範疇はそれぞれの封建領域が地域構造を形成する単位であるとき、その形態、大いさ、位置の如何がこの地域構造の成立や変動を左右するものであるところに成立する。この領域の位置と広がりを決定するものが、封建的権力関係に左右せられる場合にはそれは必ずしも自然的地域構造と人間の経済的熟慮である経済法則とが触れ合うところの地理的に理性的な場 geographisch vernünftige Lage^⑥に必然的に定まるものであるとは限らないけれども、領域のうちには一定の特色を有する数多くの経済地域が形成せられ、資源や動力や産業、人口や集落、政治交通や文化の諸機関が相互に協力しあい有機的な関係をもつてそれらが領主貨幣経済的に統制されるとともに農民貨幣経済的発達があればこれと競合対立しながら自立をはかり、もつて統一的、有機体的な全体を形づくる様に期待され、またそのように作用せしめられた^⑧。それは藩の領域における社会生活が営まれるための一種の「容器」ともいふべきものであり、その社会生活の安定と進歩のための経済的基盤を与えるものなのである。従つてその中で歴史的行為によつて

継続的に地域が形成されていくその容器は一定の形態をもつた固定的な存在物であるが、それは交通路や經濟活動範圍の膨脹、生活空間の拡大、文化的接觸によつて時に伸縮し、時に凸凹になる統一的連関である。そしてこれに対する矛盾が生起、激化すれば分裂的に作用し、或いは拡大的にあるいは縮小的に仿く場合も存在する。かくして領域は政治境界に囲まれた地域と解せられるのであつて、その發展の過程において經濟地域構造の分化、多様化と機能的結合によつて、即ち領域という生活空間としての土地が、政治境界、經濟統制によつて分離的に、また交通機能、生産機能の地域分化、交換市場の拡大發展によつて結合的に作用されて、その内容を変化する。^⑩このようにして存在する領域であるが故に經濟的に、生活的に、関所や貨幣制度或いは商品移動や、輸出入や交通制度によつて他の領域から區別された生活空間が連続的に成立して実質的な差異を示すように色どられていく傾向がある。^⑪そしてこの統一地域の中で重要なものはその中心となる組織体があり、その統制、支配、吸引力、影響などの下に城下町や周囲の町や村など、郡、地方にのびる内部の機能的連関性によつて統一されている。領域は産業の配置、社会の構成などで複雑な多様性を示しているが、しかもこの多様性は相互に連関をもち藩の政策の反映として築かれている。

このように領域は生産、流通、輸送、消費や貨幣、貢租などの機能關係を結合の因子として、領域における中心要素と周辺からの求心力とその機能を伝達する手段とによつて、円滑な遂行を意識的に或いは無意識的にせよ、考慮して作り出されたものであると考えられる。ここに成立する經濟体制が領域經濟である。富山売薬商人が他領域内に行商地域を選択するのは、この領域經濟との関連において生産費、価格、とりわけ運送費によつてその範圍の適地を見いだすのであつたが、この領内行商の營業免許を獲得するための第一次的必要条件は藩權力からの免許によるのであり、また指留^⑫行商圈の封鎖やその解除^⑬行商圈の再解も原則としてこれを基準としたものであつた。

藩のよつてたつ地域である領域は一定の広がり土地を占有して政治的自立をもつて存在すると共に經濟的自立の可

能な大きさをもつものである。領域において消費される財は結局において領域の上で生産されなければならない。いうまでもなく領域経済においては需給の適合、均衡が計られたが、消費される財のうちには他の領域から輸入されるものもあり、この輸入を可能にするためには、これに相応する金額の財の輸出が準備されなければならない。領域経済において消費される財は自らの領域内で生産された財とそれを輸出してその代りに輸入された財とである。かくて領域内で生産される財——土地はその際の本源的な生産手段である——の量、そして金額のいかんが、その領域内の財の消費、そしてまたそのための輸入を決めることになる。マウルが領域の土地が、その領域の營養土であるとした由縁もうなづかれる。^⑭この意味で領域経済にはその永續のために收支均衡による経済的自立が必要な条件であつた。幕末諸藩の財政困難となるや、内においては国産の奨励、外に対しては専売仕法による中央市場への進出を企てて国産を他国に売弘めんとする考は林子平の「上書」にも「土産の多きは国の益となり、土産のなきは国の損にて御座候。其品は土産を取て他国へ廻候時は他国の金銀手前へ入申候。」^⑮とあり、貨幣の領内流入の増大をはかると共に輸入に対しては禁止或いは制限の方策をとつて、一面においては封鎖性をもつとともに領域経済間の取引によつて示される地域的な分業の利益を内包する限りにおいてその解放性を併有するものであつた。青陵が「稽古談」において富国の策とする「産物廻し」^⑯は即ちこれであつて、領域と領域との間の財の流通の自由をその手段とする立場にはかならない。

封鎖性あるいは開放性という概念はもともとマックス・ウェーバーにおいて使用された。^⑰彼においては社会関係が外部に対して開放されている(nach aussen „offen“)ということは、社会関係を構成している社会的行為に参加することが、もし事実参加の能力さえあれば、何人にも拒まれていないことを意味した。これに対して社会関係の意味内容あるいは秩序が外部の者の参加を排斥し、或いは制限し、或いは条件づきで許す場合には、これを外部に対して封鎖されている(nach aussen „geschlossen“)というように使用している。^⑱ウェーバーにおいては一切の社会現象は社会的行為

に還元されて、社会的行為の場において把握される。社会的行為とは他人の態度によつて自己の態度が意味的に理解の可能な仕方方向づけられた行為、換言すれば、この行為は意味の結びついてる限りでの一人或いは多数の個々の人々の態度 *Verhalten von einer oder mehreren einzelnen Personen* ^⑩ を意味するのである。このことは富山売薬商人のように他領に行商地域を選択し、その諸種の経済的社会的行為の場において各商人が経営管理と政策を樹立する経営主体としての個人主義的な方法によるものに相通するものである。だからといつて決してこれは価値判断としての個人主義乃至は個人主義的な価値判断を意味するものではないことは勿論である。

領域はこのようなものとして城下町とその周辺の町や村からなる一つの地域社会であつて、この故に地域的境界と他の団体に対する統制をもつものであるとみることが許されるならば、^⑪ 地縁である同一の封建領土と利益の共通を要因として共同生活を営むという意識をもっているものとし、その独自の起源、経過、構造をもち、そのユニークな機能の下にその地域社会の特色を生かしつゝ他の地域社会と機能し合つていと解せられる。そこにおける右の社会的行為がその意味内容に従つて他のそれと相互関係の状態にあるとき参加者の主観的に思惟された意味に基いて社会関係が成立する。この故にこの地域社会のそれは一定の方法で相互に關係づけられている行為が一定の様式で経過し存在するチャンス (*chance*) 關係とみられる。^⑫ このように社会關係をチャンスに求めるならば、それはこの場合には領域経済乃至その地域社会は、その存在の基くところは意味内容に従つて、一定の仕方で相互に關係づけられている行為が過去、現在、未来に存在するチャンスがあるということである。その由縁はこの概念の実体的解決を避けるためにはかならない。すなわち個々の場合その社会關係に同一の意味内容を与えていとは限らないものであり、他領に入りこむ行商人は自己の行為にそれぞれ異つた意味を結びつけるならばその社会關係は客観的には一方的であるが、しかし行商圈にあたる他領の地域と営業継続による社会關係を持続する意味内容は営業の規範である仲間規約に定式化されるのであり、これを

遵守することによつてその行為が価値合理的に方向づけられながらも、その行商圈に対して旅先の領域において、ときに封鎖的にまた開放的に作用するのであつた。

元来「商業のよつてたつ地理的事実」はチズムが「商業地理学提要」において云うように「第一に特定地域に商品の变化を増加せしめること、第二に輸送の難易の如何によつて商業の行われる諸地域間の特定の商品を得るための利益を多少とも平等化することである。」といわれうところの一般的傾向は、右のようにして領域の地域社会において規制され、その統一地域は領域的規制を媒介とすることなしには具体化しないものであつた。商品移動の領域的規制は領域への移出入について津留め乃至関税の徴収、またそのための積極的な経済政策として国産奨励による外貨移入の防圧、またこれら商品移動に必然的に伴う資金的関係からの対策、例えば領内にのみ通用する藩札の発行などを通じて行われた。藩札の発行は他領商人の入込むのを防ぎ、金銀の流出するのを阻止する効果をもつたものであり、国産品の流通消費を増進する意図をも含むものであつた。右のような領域経済の津留は広く諸地域においてみられたのであつたが、これは領域経済の自給自足性、例えば食糧品など日常生活必需品の領外移出禁止を内容とするものであつたが、また物価調節をはかり、更にこのほかに領内産業の保護を目的とするものでもあつた。²³⁾

ここにおいて諸藩の領域的統制はその地域社会における他領の商人といかなる関係において行われたか。他の領域においてはそれがどのようににむかえられたか。いかなる形態において領域間の関係が成立したかについて考察されなければならない。単なる移動についての領域の解放乃至は封鎖の関係のみでなくそれが更にこの立場を媒介にして全国経済段階において商品生産とその流通の過程は領域においていかに関係づけられていたか。具体的には領域はいかにして交易関係をこの段階において成立せしめていたかがこの地域社会で営まれる領域経済の封鎖性と開放性の課題についての交易のありかたである。

富大経済論集

そしてそれは更に具体的には社会関係の意味内容は行商人と入付した旅先領域側との相互関係によつて領域的統制と商人資本との対立の克服関係として成立する場合が屢々であつた。ここでは旅先領域と売薬商人がそれぞれその求償的關係の意味に従つて全国経済のなかでその行為の方向を決定することを期待し、そして自らも自己の行為をこの期待によつて目的合理的に方向づけたのであつた。富山売薬行商人が他藩の領域経済に入りこんで領内の諸地方を行商したことの²⁶⁾ (Motivation) 意味はまさにこのような契機をもつて成立していたと考えられる。

- 1、例えば米倉二郎、「地域と経済」、二頁および一五五頁(昭和三十二年)参照。
- 2、木内信蔵、「地域論」(新地理学講座、第二卷)二五〇頁
- 3、木内信蔵、同書 二八四頁
- 4、例えば F. Ratzel : Anthropogeographie S. 137
- 5、A. Supan : Leitlinien der allgemeinen politischen Geographie S. 1.
- 6、E. Ottenbä : Allgemeine Agrar- und Industrie Geographie S. 204
- 7、R. Hartshorne : The nature of Geography. Kc. Is the geographic area an organism? 参照
- 8、拙稿、地理学における原理について(富大経済学部論集、第四号)
- 9、小寺廉吉、富山県の変貌(「地理」昭和三十三年一月号)
- 10、池田善昭、政治地域の理論とその模式的表現(地理学評論昭和三十一年十一月)
- 11、P. E. James : Toward a Further understanding of the Regional Concept (Ann. Ass. Amer. Geogr. 42, 1952.

12、幕末には富山売薬行商人の数は約二〇〇〇人をかぞえ、その行商地域は全国のすべての領域に及んだ。領域内で行商を営むには旅先藩から免許を受けなければならなかったが、それは原則として一年ぎめとされた。免札は配薬年継の手続きによつて継続が認められた（富山売薬業史料集一一八頁。以下単に頁数で示す。および拙稿、近世富山売薬行商の保護政策「富大紀要第九号」）。免許には行商人数、行商地域、売薬の品名、品目数が限定され（八一九頁）領域内滞在中は宿泊所を規定され、（八五三頁）仮檀那寺を定めた（八七一頁）、行商終了後直ちに藩に対し帰国手続をなすべきこととされた。

13、富山売薬業史料集、一九六八頁

14、O. Meull: Politische Geographie, S. 527.

15、上書、日本経済叢書卷十二、三十五頁

16、稽古談、卷五日本経済叢書、卷十八、三三三頁

17、Max Weber: Wirtschaft und Gesellschaft 第一章参照

18、Max Weber: a. a. o. s. 25.

19、Max Weber: Gesammelte Aufsätze zur Wissenschaftslehre S. 513.

20、拙稿、経営史の課題（経済史研究、昭和十五年十二月号）およびグラーヌ著、拙訳書、「経営史」（昭和三十一年刊）「訳者あとがき」参照

21、岩田孝三、境界政治地理学、十三頁、およびこの立場に近いものとして R. Hartsorne: Functional Approach in Political Geography. Ann. Ass. Amer. Geogr. 1952

22、Max Weber: Wirtschaft und Gesellschaft. S. 13.

富大経済論集

- 23 G. Chisholm, *Handbook of Commercial Geography*, Eleventh Ed, Introduction.
- 24 所三男、尾張藩の財政と藩札「社会経済史学」第四卷、第七、八、一〇号
- 25 堀江保蔵、近世日本の経済政策、一二〇頁
- 26 Max Weber: *Wirtschaft und Gesellschaft*, S. 13.

第三節 領域経済の立場

封建社会における統一地域である領域を充足する内容は、経済活動においてその発展をみれば商品経済の進展過程である。商品生産の進展は地域的分業の進行の形をとつて現われるが、それは商品流通を媒介として生産者においてはその適地適作への努力が生みだしたものであると同様に、旅先領における諸国から入来した商人達の営業も商品の流通組織において商人の地域選択への努力が招来したものであり、この過程には競争関係が作用している。

ところで商品生産の進行過程においては領主は「藩富」のために、農民的貨幣経済を強力に把握して領域経済に織りこもうと努力を重ねてくると共に領域経済は交換部分を拡大し他国との不可分離の交易を内包しながら、領域経済の再生産の基盤を拡大しこの上に自らを安定せしめようとした。農民の商業的作物およびその加工品についての専売商品はいうまでもないが、この蔵物商品に対して、より広い市場を求めて流れる納屋物が藩の領域をこえて運ばれた。しかるに封建社会における政策主体の割據により、他領域からのことに納屋物の流入については他領商人は領域外商人であるが故に領主の政策或いはこれと深い関係をもち特権的商業資本の統制によつて地域的に異つた影響を蒙る。^①

このようにして特定の領域における産業は統制と競争の二者の絡みあいによつて営業の動向が規制されるのであり、そこに展開される商品移動或いは流通の地域性と産業統制の関係を明らかにし、諸地域の経済発展と領主の産業統制と

の關係のうちに諸対立の發生過程を追求しようと思う。

江戸時代の經濟思想は、このような時代性を背景として成立し、すぐれて時務論的なものであつた。^② ことに領域經濟については宮本又次博士はその一例として上野勝從の「存寄書」の全文を阪大經濟学にのせられている。^③ それは輸出入のバランスに注目し、領内で生産消費される重要物資を計算して領域經濟の再生産機構を分析して窮乏の原因を示したものである。また正司考棋の思想にもこのような考がみられる。幕末の西南雄藩ではこの立場から富山売藥商人の入付とその正貨流出を連繫せしめて輸出入均衡策を示したのであつた。ここでは本居宣長と桜田質（虎門）の領域經濟についての考をのべるものである。

「領域經濟」については本居宣長が「秘本玉くしげ」において個別經濟と國家經濟とから概念的に區別して

平民の身一分のうへにて、いかにも何わざをしてなりとも、金銀を得る事の多きが利なれども、上に立つて民を治むる人の身にとつては、領内おしならして利益あることならでは損あるなり。たとへば城下はにぎはうて商人は利を得る事多くても、在々百姓のつまりとなりては、本を失うて末を益するなり。但しこれは天下と一国々々の差別あり。たとへば何にもせよ、世上に無益の奢の爲めに用る物を多くつくり出す国あらんに、これは天下のうへよりいへば損なれども、其国にとりては損にあらず。いかんというに其物を多く作り出すだけ、米穀を作り出す事すくなければ、其物の価を取て、米穀等をばそれだけは他国より買取ゆゑに、其国には損なし。然れどもその国にてその米穀をつくり出さざるだけ、天下の上にて損あるなり、すべてこれに限らず、天下と一国一国の上にてその趣のかはる事外にも多し。^④

とのべ國家としては当時の支配的な傾向である農本主義的施設をもつて国土を充填すべきであり、個別經濟は個人それぞれ營利を追求するものであるとしているが、これに対して、領域經濟においては領域内部の編成についての考察

と、領域の対外関係における位置づけとの二面から視られていて、まず内部的には城下商人と在の農民、換言すれば都市と農村との均衡的發展が期せられねばならぬこと、そして対外的には領域内の奢侈的産業の発達がみられても、それのもたらす成果によつて他領域より食糧の輸入を可能にする能力をますものであるとしたことは、領域経済のありかたを正しく把握し、領域の繁栄を目標にした見識であると考えられる。

幕末の領域経済については天保の頃に桜田質（天保十年仙台で没、六十六才）によつて書かれた「経世談」によつて知られる。

経世談は全篇十卷からなり、その内容の充実した事は滝本誠一博士によれば「往來の政談、春台の経済録、竹山の草莽危言などに比すべきもの」^⑥とされる。その根本思想は江戸時代の経済思想の一般的特徴であるという時代性を帯びて徳本財末説あるいは農本主義に傾いているけれども、領域経済についても言及し現実在即して具体的に敘述している。

凡今の世に財用と云うは皆金銀銭のことなり。しかるに其実を論ずれば金銀銭は眞の財宝にあらず……商人の商買をかせぐも、百姓の耕作をはたらくも、職人の物を作り出すも……その極意を推す時は誰も皆金銭をほしきではなくその交易する諸品がほしきなり。……金銭を重んずることは……天子、公方、大名などの上にては、便利の為に用る一物と云までにて、第一の宝にはあらず……古人も諸侯の宝は土地、人民、政事と云三つありと云て、珠玉金銀などは数にいれぬ事なり。されば金銀をよく通用せしむること、政事中第一の緊要なりとするべし。^⑦

幕末の商品生産、貨幣経済の一層の進展した時期の時代性を背景にして領域経済の実態を個別経済と主体的に區別して概念づける。個別経済の荷い手である商人、農民、職人におけるそれぞれの経営は貨幣価値の増殖を追求することを目標に行われるけれども、その貨幣はあくまでも交換価値としての意義のあることを正しく認識している。これに対してこれらの綜合体として形成される領域経済については藩主がこれを支配する統治政策の理念から見て、それは

領土、人間、そしてこの上になされる「政事」の三因子を規準にすべきことをのべて、これらに貫かれる経済的基盤の確立を第一の緊要事として貨幣流通の円滑、即ち領域経済における貨幣経済の発達をはかることをのべる。この一般的考察から現実の領域経済の富裕、換言すれば「藩富」の充実策を次に述べて商品価格の地域差に対応して成立する商業活動を領域の制約乃至は領域的意識を中心として考察する。

次に

目前に富国の術を論ずる時は何品にても我国中より仕出すよりは、他国より買入るゝ方却て下直にあたる時は、国中より仕出すは無益なることなれども、その内にてすべての要用のものはなるたけ国中にて仕出して、間を合するやうに心がけて少しの不便利ほどのことは用捨して、他国をまたぬがよし……⑧

領域経済間の交易の成立する基盤は現実には領主統制を経過して成立する価格の競争によつて地域的に現われる影響に由来し、それが他領からの輸入品の価格が国内生産物の価格より低廉である場合においてのみ、交易の存立が認められるものであり、藩際価格を基準として生産立地が決定し、これによつて地方産業の地域分化がもたらされるものと考えている。このような一般理論の立場において領域経済の富裕策を追求しようとするのである。しかし封建社会における基本的特色は領主の領域経済の強力な把握であることから、領域経済に「要用」なものはこの一般原則を編位して領域内において生産してこれによつて需要にあわせるよう努め、輸入を防圧するように領主統制が行われるとする。こうして他領商人資本の領域内進出に対しては領域経済の自立の立場から批判し、例えば他領からの出店についても

諸国より出店と云ものあり、其所によりて利害一様にあらねども、国産の物と交易の道を通ずるより外、彼方の物を持来りてあきなふばかりの出店は国の益にならぬこと多し、勿論国中の町人の名目にて内証は他所の者商売するもあり、此等は堅く禁すべきことなり、他国の人の自国に來りて永くわが国の人別になることは防ぐべきことにあらず

富大経済論集

これは別に制度あるべし、出店のその国の益にならぬと云は、よくしれたることにて、わが国の利を吸ひ取らるるが第一の害なれども、そのみならず、国中の同じ向の商人の迷惑となることなり、いかにとなれば、出店をひらくほどの者は、その本店は必大商なれば、元手の金銀に不自由もなく仕入の道もその本店の向寄自在なる故、国中の同商売の者、何ほど骨折てもこれに押並ぶことならぬ勢なり、されば終にはその出店の方多く繁昌して、国中の者は衰るやうになることなり……年数を限りて引払ふことに申渡し、その家、庫、屋敷、押代呂物などは莫大の損失にならぬやうに、その仲間、又は別商賈の者に買ひ取らしむることもよかるべし……。

勿論仲間の者にも、面々のため、并国のため云ことをよく合点させて、其上にも仁恵の意を申含め、引払ふ者の怨まぬやうに取扱さすれば随分に行とどくべし。^⑨

このように輸入業務のみをなす他領商人については第一に片貿易であることの不利、第二に領内の同一業種の商人に与える不利をあげる。第一は領域経済の輸出入のバランスからみたものであり、第二のものは他領商人資本の強固さ、とくにそれは本国の大資本による経営であり、その経営の有利性をもつために、領内商人はこれとの競争において敗北していく危険があるという領内商人の保護の立場である。この故に他領商人の進出に対してはこれを拒否すべきものであるとする。しかし相手方には損害は出来るだけ与えないようにして行へべきであるとする。この出店と同じ機能と効果をもつものは富山売薬商人の旅先領域内の行商であつた。片貿易であつて正貨を領内から流出せしめると共に領内の商人と競争の立場にあるものであつたから常に旅先の領域経済からこのような意味の他領商人としての制約をうけるものであつた。

次に第二に領域経済のこのような在り方に対して、売薬の市場としての領域経済について考察しよう。薬種は生活必需品であり、医術の進歩していなかつた当時においては、ことに疫病の蔓延におびやかされていた場合には民生のため

にとくに重要不可欠の商品とされた。例えば林子平の「上書」第一にも^⑩

諸商ひ物を他国より仕込候事可被相禁候。薬種書物杯の如く世上に無て不叶物にて、御国にて出来不致物は格別の事にて有之候へ共、当時は無益の器物、食物類迄仕込仕候。此事は御城下在々ともに可被相禁候。他国へ物を売出し候と他国より物を買入候と、出入の二つに大に国の損益ある事に御座候。

とあつて、他国商品の輸入禁止政策を述べながらも、「薬種、書物」は世上に不可欠のものであり、特別のものとして例外的に取扱わるべきことをのべている。こゝに売薬行商人の他領域入付の一般的可能性が潜在していたことが知られる。けれども現実には薬もやはり商品である限りは領域経済の統制策から全く解放された例外をなすものでなく、例えば正司考祺は、「経済問答秘録」巻二十三において諸商職の経営及びこれに対する経済政策をのべて薬種のことについて触れて

丸散屋は多是許すべからず、大体封内一万戸に三軒に究め置くべし。其薬法皆同じ。上池秘録、丸散方録を主とす世に家伝秘法などと唱ゆるとも挙て古書に出たり。蓋他邦の名薬を妄に禁すべからず。両方共に併て売り、自国の薬上品効能有らば、他邦の薬は自然と衰微すべし。若他産を禁ずれば、公威に仮托して他産を取上など致し、悪製を売りにて、却て民患となるべし。又当今売薬の売人郷村に入て、毎戸一年延に推売り致すは、甚以て悪し、是を禁じて市町店卸にすべし。況他邦の郷村洩れ無く緋図するは、武備の害ともなるべし。

薬舗に丸散円丹を売を禁じて、薬種のみに致し、丸散は別に免札を授くべし、薬舗の円散を出すは大体蛆粉腐木の類なり。^⑪

とて売薬商人の郷村に入り得意先に配置して一年後に代金の支払いをうける経営組織に対しては排撃的態度を示し領内の「市町店卸」にすべきであるとの考えも存在した。この経営は明らかに富山売薬の経営政策に対する意見を示すも

のである。しかしだからといって、他国売薬の輸入を禁止すれば、領内製品の「惡製」が巾をきかせ「却つて民患となる」ことをおそれている。事実、他の箇所ですべてのように「昔より名物の丸散薬有れば、是を僖（にせ）て少し文字を易（かへ）て売出す者もあり、其姦猾惡むべき事なり」^⑬とうれえられた状態であつた。

第三にこの売薬を国産として売弘める側の領域經濟の立場におけるそのもつ意味については、前記の「経世談」は、幕末の領域經濟の經濟的窮乏の克服等として、

此処にさまざま工夫をして、目前をしのぐを以て、器用才癆の人として、貴ぶこと世のならはしにて、その工夫はさまざまなれども、新に田畠を開き起すより外にすじよきと云分は、金銀、銅、鉛の山をほり出し、又は三草四木にかぎらず、山林材木をうへはやし、又は野山海川の獮などをはたらかせ、魚鳥角皮すべての薬品などの産物を出す類を第一とし、或は百工、諸職のわざを学びて、三都或は近国などに売出し、その利を以て補とするあり、或は全く町人、商人の仕事を学び、交易売買の利をむさぼりて補とするあり、此等は皆當時にありて、よき手際と云ものなり、其他には三都又は諸方の富人をかたらひ、金をかり出し……或は年貢、物成、諸役、運上をまし……或は金銀のかはり紙幣を用ひて、當時をまかなふ……^⑭

領域經濟としての「藩富」の富裕化をはかるためにとられる政策の第一のものは貴金属類の採掘植林事業や薬品の産出であるとする。次いでこれを補充するものとして領主經濟の商品生産、商品流通への傾斜とくに生産物の領域外への輸出や貿易差額の獲得をあげまた中期以後限界に達したといわれている借入金政策や増税策、紙幣発行策などについても考える。貴金属など鉱物資源に乏しく、また山林面積にも恵まれていなく植林事業の振わない富山藩の領域では売薬業を起してこれを領域外に売り弘めさせたことは右の實踐的理論に正に合致するものであり、領域經濟の再生産の基盤を拡大しこの上に自らを安定せしめようとしたのである。「経世談」に示された領域經濟的態度を自らに弁えて行われ

たものといえるのであり、領域経済のありかたの自覚として富山領において売薬業が結実したものであつた。

売薬市場における需要の強さについては同書第九卷に

すべての一統の人民みな同じことなれども、殊に他郷より来るもの城下又は人里に遠き所にては病ありて薬を求め医を招くにも甚なりがたく、すべて心になはぬこと多ければ是等の類を深く心を盡して薬種合薬の類不自由なきやふにいたし^⑭

とのべて領民のなかでも僧侶でも生活に苦しむ者は

其の持前の本職ばかりにて妻子を養ふに足らぬ者は医者^⑮の類、針治、按摩より売薬等……勝手次第にはげむべし。とのべ、売薬に従事する事をすゝめ、これによつて生活の資が求められることを記述しその具体性を裏づけている。

1、安岡重明、商業政策をめぐる幕藩対立試論——商品生産の地域性と産業統制(一)(大阪大学経済学、昭和三十二年四月号)

2、本庄栄治郎、日本経済思想史概説 一一頁

3、宮本又次、上野勝從の「存寄書」について(大阪大学経済学、第三卷第四号)

4、拙稿、幕末領域経済の交易統制(近刊「本庄栄治郎先生古稀祝賀記念論文集」)

5、本居宣長全集、第四、五七七頁

6、続日本経済叢書、卷二、解題、一四頁

7、「経世談」続日本経済叢書、卷二、四八六—四八八頁

8、同 五八九頁

9、同 五九六頁

富大經濟論集

- 10、林子平、上書、日本經濟叢書卷十二、三三頁
- 11、正司考棋、經濟問答秘録、卷二十三、日本經濟叢書卷二十三、一九四—五頁
- 12、同 一七五頁
- 13、「經世談」前掲書 四九〇頁
- 14、同 六〇三頁
- 15、同 六〇八頁

余言

富山売薬商人が諸地方にわたつて全国的に行商を試みたが、その場合に遭遇した最大の問題は、領域經濟における「統制」と「競争」に関するものであつた。本項においては、その場合に吟味されなければならない領域と領域經濟についての一応の概念づけを試みたのであるが、その分析視角はあくまでも統制と競争の面からであつた。

以下、他領商人としての売薬行商人は實際の行商地域の選択に當つてこの問題についてどのように理解し、そしてどのように対応し、またいかなる処置をなしたかを具体的な事例において、とくに幕末における我が国の地域的秩序において明らかにし、そしてそこに示現された經濟地理のありかたを内容的に追求していこうとするものである。

正 誤 表

領 域 と 領 域 経 済 植 村 元 覚

頁 行	誤	正
表紙	富山売薬商	富山売薬行商
59 6	衆知のとおりである	衆知のとおりである。
59 12	専門課程における	専門課程においては
60 9	本書において	本稿において
61 13	本書は	本稿は
62 9	vingt—cing	viugt—cing
68 17	understanding	Understanding
71 6	輸出入均衡策	輸出入均衡策 ^④

道徳教育と教師の立場

渡 植 彦 太 郎

頁 行	誤	正
82 16	であろ <u>う</u> から	であるから
85 9	敬条主義に	教条主義に
102 4	況人 <u>や</u>	況んや

都 市 社 会 学 の 課 題

石 瀬 秀 治

頁 行	誤	正
104 3	…ふれてきたように、 ⁽¹⁾	…ふれてきたように、 ⁽¹⁾
106 8	事にしたい…	ことにしたい…
〃 11	コミュ	コミュ